

日本ロレンス協会第46回大会プログラム

◎日 時：2015年6月27日（土）、28日（日）
◎会 場：愛知大学 名古屋校舎講義棟8階L802教室
住 所：〒453-8777 名古屋市中村区平池町4丁目60-6
連絡先：愛知大学経営学部
山田晶子研究室 tel: 052-564-6111 (愛知大学代表) e-mail: ayamada@aichi-u.ac.jp

◎愛知大学名古屋校舎までの交通アクセス：JR名古屋駅より徒歩約10分、
または、あおなみ線名古屋駅からささしまライブ駅下車（乗車時間1分）下車してから徒歩3分

◎昼食のご案内：27日、28日両日とも学生食堂は営業しておりません。大学から徒歩圏内の「名古屋駅」周辺には食事処が数多くございますので、そちらのご利用をお願いいたします。尚、飲み物の自動販売機はキャンパス内に多く設置されておりますのでご利用ください。

◎宿泊のご案内：プログラムの最後頁に宿泊施設をリストにして掲載しましたので、ご参考にしてください。

【役員会】

◎日時：6月27日（土） 11:00～12:30
◎場所：愛知大学名古屋校舎講義棟7階L701教室
昼食を用意します。代金は当日お支払いください。お弁当代は一律1,000円です。

第1日目：6月27日（土曜日）

受付：13時より

総合司会：山田 晶子（愛知大学教授）

◎開会の辞：会長 新井 英永（熊本大学教授）（13:30）

◎開催校挨拶：愛知大学経営学部長 富増 和彦（愛知大学教授）（13:35）

研究発表

司会 有満 保江（同志社大学名誉教授）

◎1. 13:40～14:15

D.H. ロレンスとオーストラリアのbush文学

加藤 彩雪（日本女子大学大学院博士課程）

◎2. 14:15～14:50

Sons and Loversの多世界——生命主義とその不満

武藤 浩史（慶應義塾大学教授）

*休憩 14:50-15:00

シンポジウム

◎「帰郷」という危機 —— エグザイルの経験とロレンスの同時代人たち 15:00-17:30

司会・講師 木下 誠 (成城大学准教授)

ロレンスとオーウェルの「帰郷」

講師 近藤 康裕 (慶應義塾大学専任講師)

ナンシー・キュナードの英国への帰郷体験

講師 三宅 美千代 (早稲田大学非常勤講師)

旧石器時代からの「コンティニュイティ」

——レイモンド・ウィリアムズ『ブラック・マウンテンズの人々』をめぐって

講師 大貫 隆史 (関西学院大学准教授)

◎総会 17:40-18:10

◎懇親会 18:50-20:50

場所：名鉄百貨店9階 バンケットルーム(愛知大学から徒歩約20分)(名鉄名古屋駅徒歩2分)

☎052-585-2976(銀座スター) または052-585-2910(レストラン担当事務所)

会費：¥5,000 (大会当日受付でお支払いください)

第2日目:6月28日(日曜日)

ワークショップ

◎D.H. ロレンス『虹』を読む (『虹』出版100周年にあたって) 9:30-12:00

司会・講師 田部井 世志子 (北九州市立大学教授)

『虹』批評と現代社会——戦争、教育、ジェンダー

講師 麻生 えりか (青山学院大学教授)

科学・機械文明を告発する『虹』——蛇の表象を巡って——

講師 田部井 世志子 (北九州市立大学教授)

『虹』は「有機的」なテクストか? ——エコクリティシズムからの一考察

講師 巴山 岳人 (和歌山大学非常勤講師)

※コメンテーター 鈴木俊次 (愛知学院大学教授)

◎閉会の辞:副会長 浅井 雅志 (京都橘大学教授)

研究発表

D. H. ロレンスとオーストラリアの *bush* 文学

加藤 彩雪（日本女子大学大学院博士課程）

1922年にオーストラリアに到着したD. H. ロレンスは、南半球を契機とし、非ヨーロッパ諸国でのエグザイル生活を始めた。

ロレンスは、シドニー近郊にある Thirroul という町を気に入り、そこで、*Kangaroo* (1923)を執筆した。Thirroul は、アボリジニ文明の遺産が受け継がれていることで有名な土地であり、ロレンスは特にオーストラリア特有の自然を *Kangaroo* を通して描くことに拘った。Mollie Skinnerとの共作である *The Boy in the Bush* (1924)においても、タイトルが示唆するように、*bush* はロレンスにとって重要な意味を持っている。オーストラリアの *bush* を描いてこそ、真にオーストラリアを理解できると考えたのである。広大なオーストラリア大陸に古代から力強く根付いている原生林 *bush* には、ロマン派の詩人が好んで描いたイギリスの絵画的な自然の美しさはないが、厳しい自然環境の中で育った *bush* にロレンスは力強い生命力を感じた。しかし、実際に *bush* には、異邦人を圧倒する程の荒々しさがあり、オーストラリアにやってきた多くの西洋人にとっての脅威となつた。と同時に、獰猛な *bush* をどのように文学を通して描くか、という試行錯誤の中で、オーストラリア文学は誕生した。

発表では、オーストラリア文学や、オーストラリアを舞台とするイギリス文学におけるロレンスの特異性について、ロレンスの *bush* 描写に焦点を当てて考察したい。

Sons and Lovers の多世界——生命主義とその不満

武藤 浩史（慶應義塾大学教授）

本発表では、小説 *Sons and Lovers* の多層的な世界を、作品タイトルの意味に加えて、モレル夫妻の喧嘩、モレル夫人が次男をポールと命名する場面、ポールのミドルブラウ的立身出世の夢、クララ・ドーズとの関係、バクスター・ドーズとの対立と絆、モレル夫人の死の場面などいくつかの重要エピソードの意味を精査することで明らかにしたいと思う。

最終的には、作品の生命主義的な側面と社会的・政治的情報とのせめぎ合い・からみ合い・繋がり合いの意味、そして生命主義自身の自己矛盾の意味を考察し、可能であれば、これまでのさまざまな作品解釈方法の相互的な位置づけや小説という「ツール」の思考や志向という大きな問題についても一言触れたいと考えている。

シンポジウム

「帰郷」という危機 —— エグザイルの経験とロレンスの同時代人たち

司会・講師 木下 誠 (成城大学准教授)

このシンポジウムの企画は、レイモンド・ウィリアムズに関するある文章がきっかけとなっている。その文章とは、ウィリアムズによるウェールズ関連の論考を集めた *Who Speaks for Wales?: Nation, Culture, Identity* (2003) の編者 Daniel Williams の序文 “Introduction: The Return of the Native” である。編者ウィリアムズはその序文を、トマス・ハーディの「ダブル・ヴィジョン」つまりは「同時に観察者でもある当事者としてみる」ことが、「緊張をもたらすもとのである」というレイモンド・ウィリアムズの引用から始めている。今回のシンポジウムでは、このような「ダブル・ヴィジョン」を通して、ロレンスにおける「『帰郷』という危機」を議論の俎上にあげる。それは「エグザイルの経験」の意味を、さらにはおそらく「共同体」の意味を、ロレンスと同時代人たちの「経験」を「補助線」としてあらためて問い合わせることにもなるだろう。

本シンポジウムは、これまでにもシンポジウム・ワークショップ等で試みられてきた、レイモンド・ウィリアムズの批評実践をロレンス研究へ再導入するためのもうひとつの試みである。そこで協会外部の講師として、現代演劇のみならずウィリアムズおよびウェールズ文学・文化に詳しい大貫隆史氏をお招きした。

ロレンスとオーウェルの「帰郷」

講師 近藤 康裕 (慶應義塾大学専任講師)

ロレンスの “England, My England” は独立の宣言であり、異議申し立てであるが、ジョージ・オーウェルの “England, Your England” はストーリーであって、それが崩壊したとき悪夢となると論じたのは、オーウェルの評伝におけるレイモンド・ウィリアムズである。彼らが共有するのは、「イングランド」からの距離であり、エグザイルの経験と「帰郷」である。ロレンスは労働者階級の青年の成長を描いた *Sons and Lovers* の時期からエグザイルとなり、最後の小説を書く晩年まで「帰郷」しなかつたが、その後の小説ではイングランドの労働者階級に再び焦点を当てた。オーウェルはアジアからイングランドに「帰郷」し、中流階級の出自であったが労働者階級の暮らしを書くことに力を注いだ。こうして書かれた作品に体現される「危機」が、オーウェルという作家をつくったのだとウィリアムズは述べる。「帰郷」が可能にした「ダブル・ヴィジョン」によってオーウェルという作家が生まれたというウィリアムズの指摘は、ロレンスについてはどう言えるだろうか。本発表では、このふたりの作家のつながりを、「帰郷」とその「危機」という観点から再考してみたい。

ナンシー・キュナードの英国への帰郷体験

講師 三宅 美千代（早稲田大学非常勤講師）

20世紀初めのパリにおいて、前衛芸術家たちのミューズとして知られたナンシー・キュナードは、詩人、編集者、出版業者、報道記者といった様々な肩書きを持つ。彼女の活動の多くは、人種差別やファシズムとの闘いに対する共感に基づくものであったが、トリニダード出身のパンアフリカ主義者ジョージ・パドモアや、チリの詩人パブロ・ネルーダと協調するなど、政治的連帯の姿勢をきわめて実践的な方法で示した。

一方で、キュナードは大汽船会社の相続人を父親に、アメリカ出身でロンドン社交界の女主人として君臨した人物を母親として持ち、このような出自が、彼女の外国暮らしやボヘミアン的生活様式、政治的ラディカリズムに影響を与えたことが指摘されている。今回の発表では、ロレンスの同時代人でもあるキュナードの英国への帰郷体験に注目し、故郷や出自、帝国主義に対する見解を明らかにすることで、それらが彼女の政治的アクティヴィズムに与えた影響を探ることをめざす。

旧石器時代からの「コンティニュイティ」

——レイモンド・ウィリアムズ『ブラック・マウンテンズの人々』をめぐって

講師 大貫 隆史（関西学院大学准教授）

レイモンド・ウィリアムズの死後に刊行された『ブラック・マウンテンズの人々』(People of the Black Mountains, 1989-90)は、彼の故郷ブラック・マウンテンズを舞台に、旧石器時代から中世にいたるまでの人びとの歴史を記述した二巻からなる異色の小説である。ブラック・マウンテンズ一帯は、ウェールズとイングランドの国境に位置する小地域に過ぎない。しかし、そこでの凄惨な争いの数々、文化と社会の複雑な変容の経験を、数万年という長大なタイムスパンで眺めることが、ウィリアムズにはどうしても必要だったのではないか、そしてそれは、ウィリアムズの人生を何度もとなくおそつたであろう「帰郷という危機」へのリアクションだったのではないか、という問いを提出したい。あわせて、『ブラック・マウンテンズの人々』と装いを近くする人類学的著作、中沢新一『アースダイバー』(2005年)、『大阪アースダイバー』(2012年)を比較参照しながら、同書における「帰郷という危機」の不在を論証してみたい。

また、「帰郷という危機」について論じるなかで、レイモンド・ウィリアムズ『イングランド小説——ディケンズからロレンスまで』(The English Novel from Dickens to Lawrence, 1970)における「ダブル・ヴィジョン」と『ブラック・マウンテンズの人々』との関連性についても言及する。

ワークショップ

D.H.ロレンス 『虹』 を読む（『虹』 出版 100 周年にあたって）

司会・講師 田部井 世志子（北九州市立大学教授）

1915 年 9 月末に D.H.ロレンスの『虹』が出版されてから今年で 100 年目！今回のワークショップでは、その 100 周年を機に、ロレンスの代表作である本作品の批評史を辿るとともに、様々なテーマで物語の再読をしたい。

昨今、大学の学部・学科再編がなされる中、多くの文学部が解体され、他の名称に座を譲る傾向にある。果たして文学は役にたつかといった、文学そのものの存在意義が問題視されるようになって久しい。そこで、このワークショップでは『虹』を再評価することで、文学の意義を問い合わせを作りたい。具体的にはパネリスト間で、なぜ今ロレンスなのか、また今なぜ『虹』なのかといった問題提起を共有し、それぞれの関心のテーマ等を取り上げることで、作品の現代的意義を探求し、作品を現代に蘇らせることができればと思う。

あえて「ワークショップ」という形態をとったのは、ロレンスの代表作でもある『虹』については、会員の皆様からも様々なテーマで多くのご意見をいただけると判断したからである。そういう意味でも今回はフロアの方々を交えて自由に議論ができる時間帯も設ける予定である。更には、2016 年に出版予定の協会誌『D.H.ロレンス研究』第 26 号において、パネリストだけではなく、広く会員の意見等も載せる企画を実施し、『虹』100 周年記念行事の一環としたい。そうすることで、協会全体で『虹』の再構築を目指すことができればと考えている。

『虹』批評と現代社会——戦争、教育、ジェンダー

講師 麻生 えりか（青山学院大学教授）

『虹』に関する批評をたどることは、文学を取り巻く時代のイデオロギーを読むことでもある。ここでは、『虹』の批評史を概観し、私たちが今、この作品にどのような批評を加えることができるのかを考える。

『虹』を論じる際に必ずと言っていいほど引き合いに出されるのが、1914 年 6 月 5 日付のガーネット宛てのロレンスの「炭素の手紙」である。この手紙は、当時『結婚指輪』と題して執筆中だった小説に対する編集者ガーネットの理解を求めたものだが、ロレンスが小説のテーマだとした「炭素」をめぐる批評家の意見は一致していない。女性の生き方を描いたこの小説に関するフェミニズム批評、リーヴィスやダレスキに代表される神話（道徳）的批評、ホルダネスのマルクス主義批評、『虹』の解釈の地平を広げたキンキード・ウィークスの歴史批評、さらにその後の批評の動向を紹介する。

『虹』において、ロレンスは人間の偏狭性を痛烈に批判しており、それこそがこの作品の発する最大のメッセージではなかろうか。外の世界に憧れを持ちながらも教会や学校、軍隊、結婚という国家システムに盲目的に追従する人々に幻滅し、自己実現を求めて漂流するアーシュラの批判の矛先は、自らの利益を優先する私たち現代人にも向いているだろう。ここでは、ディケンズ、ハーディー、ウルフ、イシグロなどの小説を参照しながら、社会小説としての『虹』の意義を再確認したい。

科学・機械文明を告発する『虹』——蛇の表象を巡って——

講師 田部井 世志子（北九州市立大学教授）

ロレンスはいわゆる「炭素の手紙」の中で、従来の作家たちとは異なり、人間存在の表層つまり「ダイヤモンド」や「石炭」ではなく、まさに「炭素」ともいるべき人間の本質を作品で描くと高らかに宣言した。本発表では、まずその「炭素」を人間の「内なる生命力」と捉えた上で、それが物語においてどのような手法で、また、具体的にどのような表象で描写されているのかを見していく。作品の細部を緻密に検討することで浮かび上がってくるのが蛇や龍のイメージや象徴であるが、それらにこだわることで、ロレンスのメッセージ——現代人の内には小さな灰色の蛇が潜んでおり、それがロゴスを人間に植え付け、そのために人間は自然や生命の母胎から切り離された。今こそ内なる緑の龍の声を聞き、蛇が脱皮を繰り返すごとく、生物としての人間の成就を目指して生を更新させ続けよ——を汲み取ることができればと思う。またアーシュラが結末で見る大空の虹を蛇との関係で捉えなおすことで、「虹」の物語全体における意味をも探ってみたい。

以上の過程を通して、今日、加速度的に進んでいる産業・機械文明に対する告発というロレンス文学の現代的意義を改めて確認するとともに、そのメッセージを『虹』という作品で取り上げる際のロレンスの重層的な技巧や表現力の妙味を提示できればと思う。

『虹』は「有機的」なテクストか?——エコクリティシズムからの一考察

講師 巴山 岳人（和歌山大学非常勤講師）

『虹』はその歴史的構造や（女性の）身体性の強調から、多くの場合「有機的」なテクストとして読まれてきた。その見方は、例えば『虹』における自然について考察する場合においても重視されてきたといえるだろう。「トマス・ハーディ研究」でロレンスが示したような、人間活動の背後に常に存在している大いなる自然の存在を作品に読み取ることは、その一例である。一方で 1990 年に T. ピンクニーは『虹』か『恋する女たち』か」というテーゼを提出しながら、『虹』が古典主義的モダニズムの要素をも内包していることを示し、その決して一枚岩的でない=「有機的」とはいえないテクスト構造の複雑さを指摘している。

ここでは以上のような前提を踏まえた上で、『虹』にみられる「有機的」な側面について、エコクリティシズムの視点からの再考を試みたい。その際に参考したいのは、ポストヒューマニズムに基づいた J. ウォレスによる 2005 年のロレンス論であり、さらにエコクリティシズムにおいて近年注目されている、新唯物論（New Materialism）のアプローチである。とともに人間を含めた生物は全て物質（matter）からなる存在であるという認識に立ち、それが示す潜在性や相互作用に关心を寄せていく。これまでの『虹』研究を積極的に引き受けつつ、それをさらに新たに展開させていく可能性の一端を提示してみたい。

キャンパスマップ: 愛知大学名古屋校舎にある建物は2棟です

キャンバスマップ



■ 愛知大学 公式ウェブサイト

<http://www.aichi-u.ac.jp/index.html>

名古屋駅からのアクセス



愛知大学 名古屋キャンパス

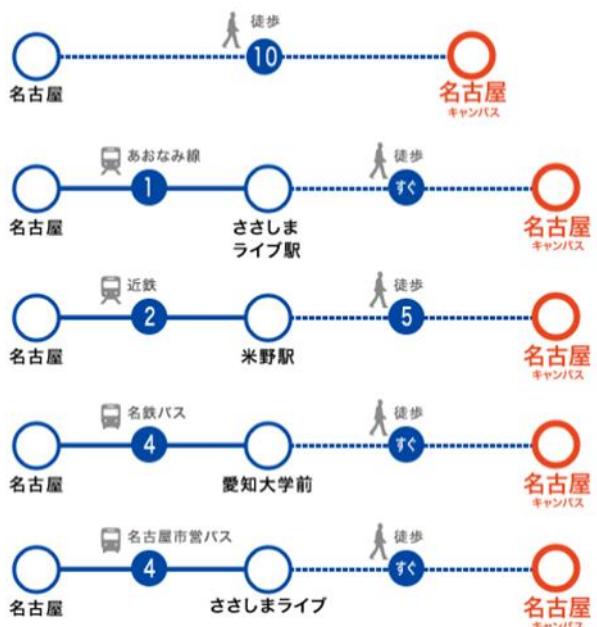
キャンパス所在地・アクセス

所在地

〒453-8777 名古屋市中村区平池町4-60-6 TEL:(052)564-6111(代表)

アクセス

● 丸内の数字はおよその所要時間です。



名古屋駅近辺のホテルのご案内

- ・ ホテルアソシア名古屋ターミナル：名古屋市中村区名駅1－1－2
JR 名古屋駅徒歩1分 : ☎ 052-561-3751
＊＊＊名古屋駅構内にあります
- ・ ホテルキャッスルプラザ：名古屋市中村区名駅4－3－25
JR 名古屋駅桜通口（さくらどおりぐち）徒歩5分 : ☎ 052-582-2121
- ・ ホテルサンルートプラザ名古屋：名古屋市中村区名駅2－35－24
JR 名古屋駅桜通口徒歩3分 : ☎ 052-571-2221
- ・ 名鉄グランドホテル：名古屋市中村区名駅1－2－4
JR 名古屋駅徒歩4分 : ☎ 052-561-3751
＊＊＊懇親会会場から一番近いホテルです。
- ・ 名鉄ニューグランドホテル：名古屋市中村区椿町6－9
JR 名古屋駅太閤口（たいこうどおりぐち）
(新幹線口) 徒歩1分 : ☎ 052-452-5511
- ・ 名古屋リバティホテル：名古屋市中村区椿町21－20
JR 名古屋駅太閤口から徒歩3分 : ☎ 052-452-3355
- ・ シティホテル名古屋：名古屋市中村区椿町16－21
JR 名古屋駅太閤口徒歩3分 : ☎ 052-452-6223
- ・ 駅前モンブランホテル：名古屋市中村区名駅3－14－1
JR 名古屋駅桜通口徒歩2分 : ☎ 052-541-1121

*******Memo*******